

骨董集

卷之四

三三三

2135



骨董集上編下之卷 後

江戸

醒齋軒

○勧進比丘尼繪解

日

下にひどせ。古画。その風貌をりて時代考へる。寛永の比妙けもの。勧進比丘尼の繪解。体ふぞあるべた。

東海道名所記

萬治中印本 卷二云
横井子意作

「このところ比丘尼の伊勢熊野にまくが。仍とほこめよ。その弟子みみ伊勢熊野よまゆる。この故よ熊野比丘尼と名ば。其中よ声く。哥をうひける。あゆのゆりく。くみて勧をへたり。その弟子もく哥をうひき。やく熊野の絵と名づきて。地ぐ拵东也て六道乃むり相を絵よききて。絵とたをゆ。おもあくねまく女房達はまさにまうで説教すんごゆきく事あらわ。後世をもくぬ人のために。比丘尼のゆきと。がくあうをもくわたりりる。う乃写はくらむくうすのう。う焉世伊勢あまのれど。行きもせど。界絵とき。

きのあくど。哥をゆんううとく。云ふ。とあり。かれば昔の勧進比丘尼の地獄極樂の繪巻をひく。人よそ一きく。絵解。と。仏法をもくめたり。下の古画の体をもくよ。寛永の比よりうそかそれて畠し。の絵巻の手よ持てる。斗とく。比丘尼二人じく居て。緩解の言小節をつけて。抱子立してく。ひくやとかがゆ。日次紀事延宝貞享の二月の條。俗彼岸中專作。仏事・民間請熊野。比丘尼使・說極樂地獄圖。是謂開道通鑑。の比うちも其ううりへありけんか。

不産女の哀を述する。今說經祭文と云ひ。不産女らう。血盆地獄の中。か人許多種のひ罪を受けるを見て。悲哀して。獄主と。厨子の奉ゆ。後を秋の夜よけ。鎌をうし。地獄和讃をともへ。勧進をもくの遺意よやく。

勧進聖判職人哥合

天文六年四月。絵解とよぶ者あり。その圖とく。俗体もく鳥帽子小素襪を著。琵琶をうだ。杖もくと雉の尾をつけたらを持のれがまくよ

画卷の如きをもあてり 絵解の花の哥小

花の絆とくうとうじの我まくすと 日述懐の哥よ「後とかく」琵琶の
くある我をこそとくまねんたるめくらきりれ 判の祠を考のろ小古ハ軍ぬ候
さぬうぐと画卷こよそ。杖のこよそくつ。絵解よ節をつく。平家をどをかる
すうに琵琶小合せぞくれれるよやとかが。杖改よ雉の尾つあぢたんあばくそ
あめうす。絵卷の破そくねざるため歎比丘尼の絵ぢたも。毛筆のうほくけるよ。

○端午の茅巻馬

先松みゆの
散本集の
ちよみ馬の
連等の繪と
下

卷十九 草木部より 泰覧法印。五月五日人の供。菖蒲をばらまくと
くみ作りり。アリカ。ごめのくちをひざむ。馬をやひだい。そとそ
今按すよ。泰覧法印。八十二代 後鳥羽院の御時。文治建久の比の人。當時
五月九日。茅芽りて馬を作り奉わし。アリベ。日本歳時記

貞享五刻

端午小蘋の葉をて馬をばらましが。近年ひだえたり。とくづの右の茅巻馬のう

○古画勸進比丘尼繪解圖

柳塘館摹藏

接する。今から百八十年

前省。永中より
絆あぐ。前省。白丸布
七十番職人尽の
縫を合せんべ



武陵繪寫

うるべー。五月五日。艾子らひさき虎をはくまし。ひよりぐるあふ。それと並んで、漢籍よりあるてんたう。和漢相似たるふあり。

○端午の頭巾・袈裟・小人形

今より九百二三十年前。延宝天和貞享元禄の比。五月五日。男児紙之遣る。頭巾・袈裟を着。山伏の体と出でてねびし事ありき。日次紀事。延宝五月

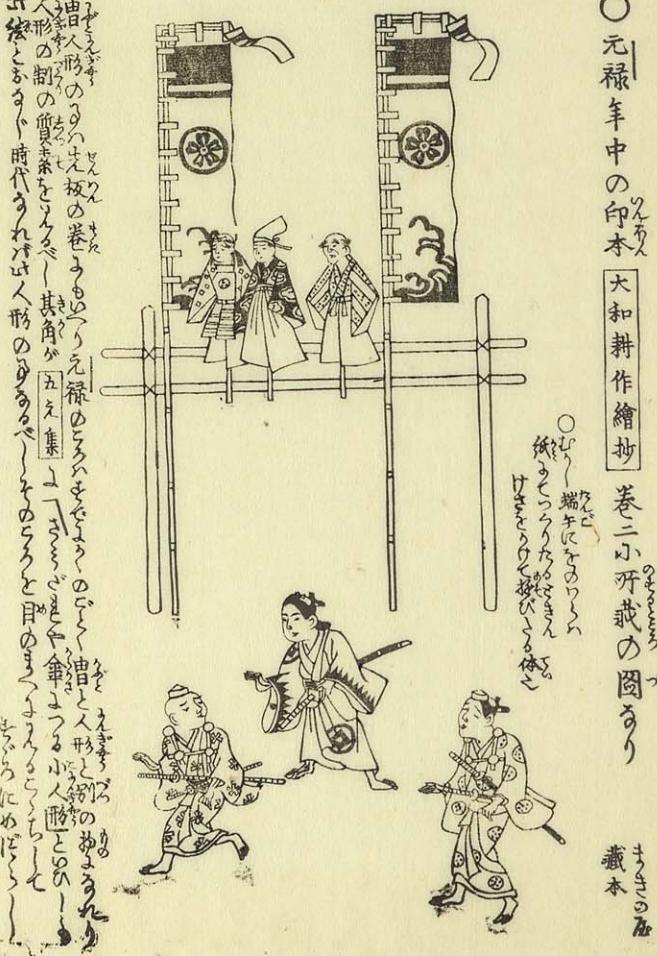
五月の條云。『以柳木一作大・小刀一是謂菖蒲刀。伏射耳横之。腰著頭巾。伏射耳用木一刃。或謂菖蒲刀。云云。』雍列府志。貞享元禄小川入一家。端午所用木一刃。或謂菖蒲刀。云云。又木長刀。木甲。山伏。之頭巾・袈裟。并藥玉等物賣之。之に螺。奉持蒲刀をうそりとあらぐ。それをひそめ。五月の初。ときん。もじゆけ。やう。菖蒲刀をうそりとあらぐ。それを子供。五月四日。小子供。おやうぶろく。片巻し。ときんをゆうり。たまきとあら。菖蒲刀をさし。わらしき吹あらぐ。え。』とあり。これらとえりくすよ。そべて下の古画。ゆいとくわらぐ。今へもれかた。事すれがばなし。

○元禄年中の印本

大和耕作繪抄

卷二 小舟載の図

藏本



○増補人形のひな板の巻。もじゆう元禄のころへまようのひな。猪と人形と御のめようれい人形の制の質素をもよそ。其角が五え集。よ。おもてざと。金よつる小人形。とひ。出縁ともよそ。時代うねれば人形のひな。と御のめよつる。うねらうと。めよつる。うねらうにかだらし。

古事記
宇波那理
大和物語
又檜垣
集うつらう
前事記
ことえふ
前事記
ことえふ

古事記
宇波那理
大和物語
又檜垣
集うつらう
前事記
ことえふ
前事記
ことえふ

嫌・宇波奈利

日本紀

卷二 嫁姑の二字をうなり移と訓り。

後妻・和名鈔

後妻・和名宇波奈利

新撰字鏡

新撰字鏡

○後妻打古圖考 四

うなりとの後妻をいふ古言へ和名鈔後妻・和名宇波奈利新撰字鏡

昔物語
室間家の比のあらざるや相当打といふなり
とすん。うなり打ちもひける。妻を離別して後の妻をむり見る。
其夫の小りと前の妻あらき女どうめをたのむ。相当打を催し。やぶ前小後妻
の妻の方へ使ひをそろはく。某の日某の時相当打よあくべきとひひす。
其日よつれは前妻をうどあらき女どうめ。わのくあらひゆうのりの
をりそ。後の妻の方へゆき。墓所に入て打まくる。後の妻の方もあした
かをたのみかきて。うどあらきと。うそちうひのうそ小時前妻後妻
の媒妁者と。侍女郎小さりせと。双方の中より。あくひみだて
かへらえうり。たゞひに男をうどある事のせどりとすん。以上 摂要

○うな打の名へいまだ他の體ふべくあらざる。

寶物集

卷二云「村上帝の宣燭殿の女御芳子と。小一條左大臣の御娘打戻」とぞたゞく。眼て御覽トリカ。餘小妬思けろ。九條

右大臣師輔の女御と。土器の破片と打給ひけると聞え。さて御兄の原一條殿伊尹堀河殿兼通三條殿兼家三人あらき。御切とまり

の原一條殿伊尹堀河殿兼通三條殿兼家三人あらき。御切とまり

小成給ひ小ぎとぞらそへ聞え。増ての下子。うの後妻打とうと

と。髪をわみぐ。取組引組むる。理ひと侍。べき。云云

源平盛衰記 卷一云「村上帝の御宇。左中將兼家と云人あり。北方三人

持られ。異名とへ三妻誰と申けり。或時此三人の北方一所を寄合す。妬色顯とて打合取合。髪をわみぐ。衣引破りあいとて見苦しやれば。中將い

穴六情とて。宿所を捨て出給ね。取る者もあと。三日まで組合て。息つき

治承二年
今文
化十年
またを三十
六年也

弘安六年
十一年
三十一年

居たり。二人の打合の常の事也。まことに三人されば誰を敵共あく向ふを敵と打合けるこそ喫へけり。云云

宝物集とば各と時代もかわらぬる。うちの二番うむに

村上帶の所時のよりをひて。あればうあり打ひのよくわ。

狂哥端 曾呂里狂哥端と云ひ後

の名也。寶文十二年印本 卷二云「教月上人とぞたゞとぞひ」と。國々をめぐり遊行しけるが施主のある里にて。女房のうへうへうへとおひきをそそぐみる。「その中よ女のむちぐうぶ女牛の角やぢゆう木あら木」

○但一此層の卷下に後の物さればだしきする證よりあらへとひばれど。

教月ハ古久人あり。沙石集 卷五 三井寺小教月房とぞ中比碩學有けり。

云云 とあり。各ハ其法師が弘安六年内にまきをりれるもの

三国傳記 卷十一 三井寺小教月功法橋とぞ人

第三條 第三條 三井寺小教月功法橋とぞ人

あり。如法經と書寫ること四十度。云云 稲葉とある事。古久人有る者。右の教月とぞ別人也。又狂哥又名なづかり一曉月

續拾遺集 卷五 三井寺小教月房とぞ中比碩學とある事。古久人有る者。右の教月とぞ別人也。又狂哥又名なづかり一曉月

古久人有る月印教月とぞ中比碩學とある事。古久人有る者。右の教月とぞ別人也。又狂哥又名なづかり一曉月

嵐山集

至安四撰明暦二刻

文三

歩金袋

明暦一作
明暦万治比

正定

絆脣

明暦一作
編妻のうへりうらうむらく神

貞晨

新續名作バ集

万治三撰寛文七刻

林逸節用集

明暦

言口辞部・嫌打

書言字考

媚歎

貞徳

前句

附句

きくよみ坂乃辻すまほ袖

○

於圓舞妓古圖考

五

下ふ摸

下に摸

下に摸しやる古画で、とくらうよひがえど。考ふるところを。

かくを二百年以來、やる風格のあつたまつらひとめをなだめる事ある。

下ふ摸しやる古画の原本に附する考へがまに。圓舞妓慶長年中あづあ
小やりて。哥舞妓踊をひと事。或古記小てえたり。當時目の中によつて
さぬをやける絵あるべ。とくらうよひもあるべ。今按ぞる小。
羅山先生文集卷五 云「今之歌舞妓非古之歌舞妓也。若

古画後妻打圖

古畫宿寓



さけりを、髪を剪りとひり。
さくらのもの、その遺風あり。



野椎 下之巻 二云
元始 每遊 宴以官女 十人一按 雜名爲天魔舞首垂髮
數辯 戴象牙冠 身被纓絡一云 近年出雲巫京下表也僧衣
刀を横歌業を修みる爲きと名づくせの風俗此襄娘とし 惺窩とあ語
やくに胡元の天魔舞。今のかぎにて似て其の作らと中すれき。
かくある國か腰すうらのどうきわをなれたりと。天魔舞又からくとぞ。野椎のあるの自序云。あとのうのうの秋のあらえね
けり。併つて。かくのうらがうら。野椎のあるの自序云。あとのうのうの秋のあらえね
けり。惺窩先生へ。元和五年より卒せられれば。その前慶長中。くにがくがんと目めすふ
るをくりのゆき。これ一草あぐりければ。明徳とあくにたれり。俗説并 卷三十三

天魔舞の事記を引く。

そろ物語

寛永十八年印

本・杏花園藏

小云「まよ長乃らうわひ。夢雲乃園」

又・小村二十九人乃じめア。シヒトヒヒト。御くちゆう小かざの庭さ
「れ花女ゆひ一ヶ。中畠此花女男舞ふきと名村て、うそとみじく。折
えく扇子結。手を指。きこのにし一陽のうそと名村。今夜うそうひ。あざよ
のやうれ世ア。おえ顔色在双ナ。神をひ。おもふをやひ。そる人ひを
まどせり。それと近ナリとゆう。諸國乃花女。おのむらをまわび。一度の
復者をそろへ。葬墓を立ちた。笛などはく。そを打たる。松むき戸を立
た。それを諸人よつとそらる。云云。江戸町のうそつまみよう。はね悟の巻首より
えすまつとまわぬた。草紙五十二冊あり。云云。愚老曰。されば。蛇と被ふく。うそだ。ろ
也語三千冊。そのワソヒが。御傳。御をあらう。云云。我見をりうい却。一派よほく。えく
をあらう。お伝と名付んべ。歴とあらう。興がま。寛永拾ハ辛巳晩三月。中旬用板と
あれば。物語の作者の。著者の時とて。そらう。まきをまゆう。よそ一人を。えらう。人を。
あれも又明辨。京童。明暦四。年印本。卷二云。そもく。まきとく。出雲神子の葬
ある。いだまう。云云。まきのびそめー也。このこと仏号をまく。鉢をまく。念佛からうせ。娘。
そもく。まきのびそめー也。このこと仏号をまく。鉢をまく。念佛からうせ。娘。

そりとそとく。男の壯装束もと哥葬を。それぞうげんとゆひう。また見る
云云。東海道名所記。万治年。中印本。卷六云。『むりしく京よ歌葬妓の尼
ギリ。出雲神子小かくとゆる。五条河津。の橋づめア。そ
そふとどりとりのゆきとゆく。その後水井の社の東よ葬墓を。こ
らへ念仏をうり。哥をまぐれ。おまかせ。おののこ。おれをまとい。鳴鐘
を首ようじて。笛つま。小拍子を合せて。をどうけり。その時の二味線のうそ
うそ。かへて三十郎と。おのの狂言師を。まく。傳助と。ゆりのと
ふねぐよ。葬を。三十郎が狂言傳助が糸。ゆりと。醒云。とくの京中
これようう。おれと。えおむる。わじた。六條の頃城町。うそ。佐渡鳴と。ゆくの
かくらひ。二象繩。おの東のうそ。祇園の町のうそ。おの葬墓を。こ
ふねぐよ。葬を。三十郎が狂言傳助が糸。ゆりと。醒云。とくの京中
とある。おき女のをまう。四条川原よ葬墓を。だそ。けいの。数多出で
葬を。おもせ。云云。作者の中川。林雲。中川氏雲。林雲。中川氏雲。

東海道名所記

三十郎が宿をとる。系中うちよりうう

哥姦妓車始
卷之二

の留齊侯

ハ松屋夫人

スルカ

スルカ

スルカ

スルカ

されど、人を不じに。云々とあり。今案をよし。昔は小出で札の文小いく。

延喜月八日。於北野名古屋山左衛門在所。系檢女之。不作城。一望念望之人。頗來見。

延喜月八日。於北野名古屋山左衛門在所。系檢女之。不作城。一望念望之人。頗來見。

如は極小書てはよ歩きへとある。とあるとくらむ。在不女のゆゑをへり。併

かかき傳めとありひまぐべく。がくほくはみづく。○右の傳承を人なり。

又同書

卷之

一

哥姦妓車始

似名代のつゝに。系檢權三郎。と云名を乞う。

又詐諧師紀逸

ゲハそれ

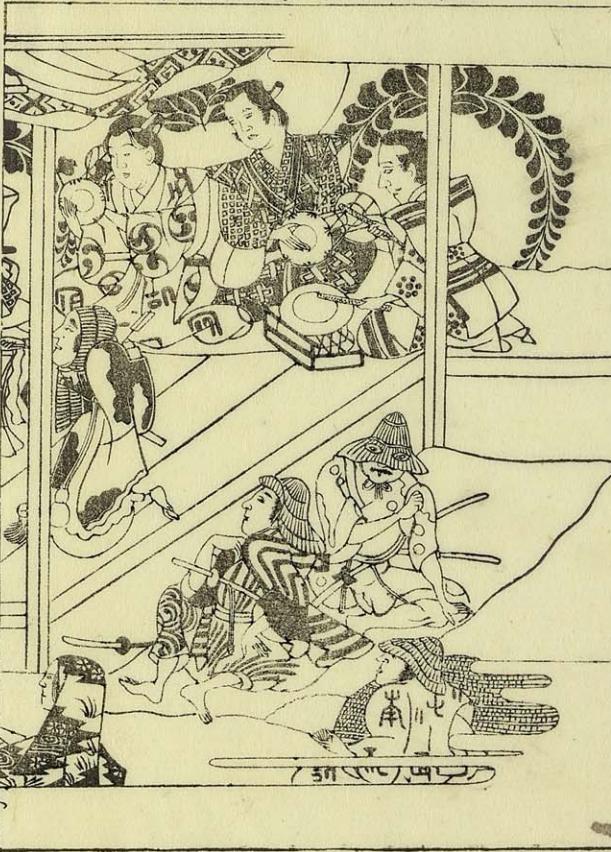
の日記。小糸縷權三郎。女形の始り也。とあり。

ひりとり權三郎とぞる。かの傳承がいとてをばく。老矣。それらを
かりよ。糸縷とぞる。かく名をもあしらる。がうよらをありけり。

○慶長年中の繪於國哥舞妓圖

原本梅龍園藏
摸本著作堂藏

○山家三絃う。
○山家名所記よ
その時人云々。織い
あくまきとくるよ
着合ひ。
○うちとおもうちたん
をあびてうるわ。同番か
えらば。ほのかかる
やうする体あるらべし。
○佛ふく尾かけたん。
うにが男ふねーなる
作さへ。
羅山先生文集。よ。女
腰服を腰。髪髮を
崩して男の髪とす
かるをうなぐ。裏を
かぶとあり。筋合を。
又。
そぞろ物語。よ。髪髮を



骨董上編 下之後十



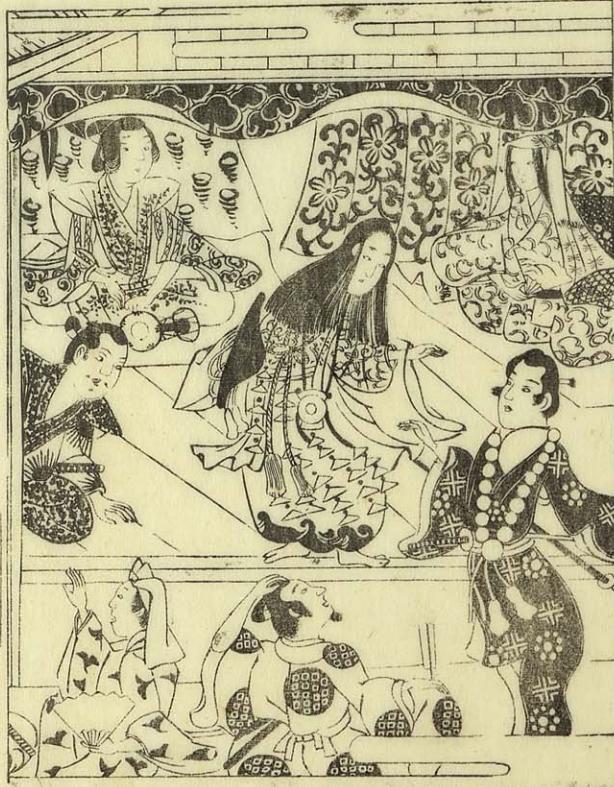
みじく切りきり。う
みあひるやまきとす。
とうるみちくゆめ
り。京童。よ。りを
うこへ男の装束。本
とくやまきと。といふ
すあひがく。
○念保をうじよけ
たん。哥舞收奉始
の説ふあり。そとの
役つけだるもめぐらし。
御糸の事い。先板の巻
よ。うと各事あり。
うくめんもあきこま
げりあり。
○羅山先生文集小
男の女服を腰。一と
あらとをり。ばく女よ
おれ。いたく。てがき
と三十郎うべ。ぐら
ひもをひとごとの
かねうりあり。う
前よひくがどく。

○かうう髪と侈衣を着。いはきとる。
今がねんかうとどりの仰るべ。

○せ樓
よながわがまえの天舞舞よゆくと
ゆづれ。腰すくらのこゑむをなれとぞれ
うぶに。舞よくとぞれ。

新海だ名本記。

わく坐よそれかの
ごみのきまくら
身持をひよりと
云ふ。どもまく筋食を。
五佩よ松くさりの
あれともどみのを
なれする。みのを
あるべし。足袋ハシル
まくらよりうどれ。え
ねの巻よどる。むろ
よだれびざれ。京童
かく早とぞくへと
念仏をうさーと。
ソトニラヌモうあす。
○とよ念佛をうがふ
かけらる男公。ま
三十郎。さくべ。
○サクのさくもぞも
古春。春。春。春。春。
て山國の眞。うと。



骨董上編下之後十



○武旗をうれば。
慶長年中。今
文化十年まで。がとう
二百十餘年のじ一の
貴本の風俗。風のまへ
みうきと。うらに。あ
おうきと。あく蓋をうけ
ねうさだ。と。と。と。
質村あり。

○人もの人男女ともに
うきりの。うりを
あうふと。人目をまつ
ふれ。かくねだ。
もうをうれ。うふ。
むくの質直の
風俗をうれらすも
おうべし。前もうじる
うく。あく蓋をうけ
ねうさだ。と。と。と。
質村あり。

よがえきべ。

○右の繪の詞書

おゆみ
おゆみ
のゆみ
れゆみ
いゆみ
ゆゆみ

いにあゆみあれどもあゆみ
きみみてあゆみゆきみみて
をうみて今やとあると
きとゆみゆきみはる
てうせよとゆめゆめ
うちゆみてしをくらかひ
くれ
りあゆみしゆるる
ほうちれぬけてねとくら
ひとあゆみゆきみそんじ

滑董上編下之後三

もあゆみんがくくせうた
りあゆみゆりくとそれ
ゆえがくのくまくこくは
ねぎくわくちもみくよあゆ
きかくめれりひとうきてく
とくもくひまくうるうふ
とくうきくのくわくき
よまくわくうちわくると
うけくわくとく

○ 酸醬を吹びらる事

七

今世の女童のやくづきと吹あくひがいとあさき事。『芭花物語』八方

立川花の巻。寛弘五年の所。宮へうのあはほ移かたります。云
たゞい西乃清年からむろとふことあひ一まをどいとまくぞれハ一あ
めり。まことにあわいと心りとがたまぐす。すくを詠り。云々。あひるあくうく
あう。酸醬

づきあるじを。あたぬくめく。多々たらんゆうみど。ええさや詠り。
とあり。當時わづきをあたぬくぞりのゆりければこそ。あたぬくらめくよ。あまにけ
つよ。ハ宮中せんじとあきり。それをしてあそぶれし。や。寛弘五年より。
今文化十年。かづきを八百六年。かく。かく。もあく。かく。か
めり。もく。ね。さ。あり。

原氏物語。此分の巻。あくうのすゑをつる。あくづきとくらめゆ。あく。
らう。あく。髪のかくれるひぬく。うそく。おだれとあり。あく。あく。あく。あく。
紫花物語のところ。よ。

枕草紙

異本 小「れやまくのくじれ物。やづき。」とあり。やづきは食物。まく
あく。絶ば。あく。を。ね。まく。大まき。くじれ物。とく。
ゆふまく。や。の。と。織布の。を。まく。じく。とも。わ。

本草綱目

卷十

酸漿水の條

下主治

云食之除熱

治黃病

胎熱難產

卷十一

酸漿實丸

治婦人胎熱

難產

益小兒

附方

云酸漿實丸

治婦人胎熱

難產

あれば婦人小兒のあづきを口に呑みあるるぞう。

○小兒をあやしよハアとひふこと八

古今著聞集

卷十

恠異部

云物よ児をもれたらるをひる條

門をもぐぐーくたぐりのあり云々

うーうる子さらせんあけとひよ

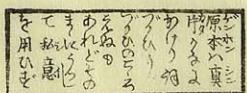
あねたそろーくてあけどるなどに家の影よあまき声して

ぞあわらひ。今小兒よじりてハアとひよ

云々大よワシふらゑをすらびてあやさくろぐあるべ

○比比丘女九

今童持バよよさうーといふ事をもめ。これいと古代事え古ハ比比丘女と
惠心僧都閻羅天子故志王経を見て其心を得て始まセ給ひけり。夫
地藏菩薩ハ中有遂津の方便閻王廳庭の利益等在乏先中有遂
津の利益者獄卒罪人を引卒一て還時戒問樹と云木の本よ
地藏菩薩罪人を乞給中界・獄卒無力奉レタレキ又無縁の衆
生をば・中界・押奪取給也時よ獄卒等罪人を取返さんと云可取
比丘・比丘尼優婆塞優婆夷と云此時地藏菩薩云上見
利鏡下見頗梨鏡と云意ハ淨頗梨鏡又淳る罪業の衆生也
こえても若又一善めや有らん頗梨鏡の上をも能ニ見と云義也爰
きて僧都地藏の悲願を感悅の餘りよ般若院の地藏の前よ参て
此經を被講後現共童部を多集て地藏與獄卒取ん不被取ともる
所を地藏法樂の爲よ両方へ衆を分て李び踊り給り始て取



○三國傳記卷第二十六條云「童部の處小比比丘女」と云事ハ
恵心僧都閻羅天子故志王経を見て其心を得て始まセ給ひけり。夫
地藏菩薩ハ中有遂津の方便閻王廳庭の利益等在乏先中有遂
津の利益者獄卒罪人を引卒一て還時戒問樹と云木の本よ
地藏菩薩罪人を乞給中界・獄卒無力奉レタレキ又無縁の衆
生をば・中界・押奪取給也時よ獄卒等罪人を取返さんと云可取
比丘・比丘尼優婆塞優婆夷と云此時地藏菩薩云上見
利鏡下見頗梨鏡と云意ハ淨頗梨鏡又淳る罪業の衆生也
こえても若又一善めや有らん頗梨鏡の上をも能ニ見と云義也爰
きて僧都地藏の悲願を感悦の餘りよ般若院の地藏の前よ参て
此經を被講後現共童部を多集て地藏與獄卒取ん不被取ともる
所を地藏法樂の爲よ両方へ衆を分て李び踊り給り始て取

比丘比丘尼 優婆塞 優婆夷と云ひけるを。能も不知童部共早く
云んとする程よ。取てウヒフクメと云ひける也。是深き意有て薩埵の内
證小稱故也。地藏の法樂も是を取んと。されば吉野の天河の辨
天の御前より老耄白髮の山凹み至る所也。面もヒフクメをして
法樂も是本地藏菩薩も御座故也。

されば童及びの子ともかくは比丘がうりの如く。毎年承享三年にあれどりのあれば
いとぞ。承享三年より今文化十年まで三百八十三年。とくに童の如き。
あらざれり。あくもその廢りを
あらざればり。あくもその廢りを

鹽尻

卷十 小云 和州天川寺 天大の參。夜入て小児をゆくめ並べて歩行せ

一。じ。鬼の出立たる民を幕内より至て。奇异地の小児をちうんともと。そ
法師も小児も同音よ。文を唱てられを追ふ。是より鬼の変風う。或云
彼唱呼の文ハ。獨羅天子經の文也。天の本化を地藏菩薩と唱へ。被經
此行法ありといふ。わらび。今から百年なり前より。今も叶奈やだらぬ。○鹽尻ハ。卷の
おまき

○ 比丘立女圖

られ今おづまうて。あをさろふとろ
といふりうい往びの原より。比丘比丘尼と
ゆきそ。音はひそひふくめといつ。前すゆ
とうらうら。惠心院の傍都よりもまれり
ゆるべり。うれりく。

日本法華經疏下の卷二云

僧都迨春秋七十六。

以實仁元年六月十日

寅時刻水遷化矣

滅後りうちに二十

五年を度す

て長久中よ

撰せし物あれば。

使こぞみてたれり。

續本朝性生傳十一

元亨歌合卷四

も僧都の爲

傳を載て入滅

の年月日。さりびよ

享年。これにあらず!



骨董上編下之後十三



○ これが古画よあらうと
三国傳記の文の
かみがまをよからずん
とく今あらたづ
けくもどなる圖あり

○ りきくふとも月令廣義
鬼戯へど小いの
鬼戯へり通雅
鬼へ目ゆくのひよりよ
といふ名あり和漢書に極る
事也。

○ りきくふとも月令廣義
鬼戯へど小いの
鬼戯へり通雅
鬼へ目ゆくのひよりよ
といふ名あり和漢書に極る
事也。

編笠を切れたる古圖

十

吉清 梅義



骨董上編下後十六

江山堂藏

かくとあそび

宇都保物語 初秋の巻

音

宇都保物語 初秋の巻云草のうつに笛の音の志作々をだづ詠てあり
葉雀陵。日向。
云草笛をこうそくあたけれ。大將^{おほしらわ}サザれめそびを年一作らん。とすまえ絶^へ
栄花物語 ほほむぐる巻。長和三年の條云^かをとこぎらひ。う

書言字考より。白地藏の三字をめぐれぬとびと御せらる。白地玉也へそ。ゆりそめの拵へど。つまみあるくん。寛文の比くられをかくれて。もひり。古今夷曲集。寛文五年撰。序。ゆあいをひや。木打川の阿闍のまみの掉頭。十三。土佐の木打川。大和のえ興寺。隠朝。うどもうのみをりそはうねえちくえき。あ。

物類称呼 卷五
牛撰 宝口
えふと云。錦倉ふそへ。やれんべと云。仙臺ふくら。やれりどりと云。
のうれん。やれんべんがく。きの轉語。やれんのやれんびの遺言あるべ
きん。

○ 目さざら軒乃雀 十二

今之きの童子おとこが小目こめで。或ひ眼まなこもちぢりといふ事あり。そよご室町
家け力七しちへがくらうのたけすやといひけり。福富の草紙
上の詞書ことわざよこそむら

さうがまへのすめをびりりのまへびと笑ふ。」とあり。

好古小錄 上卷
福富草紙二卷。画工及書者姓名不傳とありて。時代
較陸

べ。うどくの詞ことわざのまゝ、下おちれるふと、おやめく室町家むろまちけの中うちらうのやとかがゆ。

絵も又ちうか不^可能證あり。一木口尚の太鏡上用也。第一之は、
之を以てつべを吹き止む。之を以て火を吹き止む。之を以て火を吹き止む。

ゆう水鏡註目無草上卷

○又「」の名古経詔より
酒食論の詞書云々の祝

竹取上
めくと
サケヌ
軟障

めとびす。酒のあたふくらむす。兜師ある玉のくまへまぐらりとつゆ

あら

あらけちく。じきへ目ゆくし。ちくうりひ。ひくうへまくらひゆす。云にとく

此後卷も室町家の此の物。作者へ詳

あらげかくへ一條禪閣の作ありといふ。

つ

新續大日本書

万治三年撰 寛文七年刻

卷十二 雪の中やめさすとらりあよあみ

卷二十 刻のあくや目さすとらり雪乃中

吉綱 柳枝

○われこれを考へるよめう。どうのまへせしめとくよば小現目をつみてうち
われ将へうぬ。目の雀のぞと云義うべ。せんきのちどくと云。目のをひ
ちどくき。雀も手もも打ひれておぼりて。和訓禁書卷五より目乳現捕の義

ふきの義うべ。雀も手もも打ひれておぼりて。○漢籍とも云此の目やつよ似う事あまうん

成べ。とらるへおどりうらば。○漢籍とも云此の目やつよ似う事あまうん

え。名目もあわれど。桃苑日涉卷五より舉て今からしげもあはれば。りく

○目比 十三

今童の戯として見る。うらみうつと云事もあす。いとくへ目くらべといひ。

治承四年
ヨリ今文
化十一年
マデ凡
六百三十
四年

長門本平家物語

九 治承四年。清盛入道福原よ在て夢よされやくべと

みらみあられりる事をしる所よ。入道もまけじとこれらをみらみゆふ。たゞく
人の目くらべをする事よ。ひよひよまくまでもせど。ひととすらまくしてくべり。ま

日蓮御書錄内 賦恩披の上より

眞覺・知證と日蓮と云。傳教大師の清奉

よ不審申へ親よ値ての年あくそひ天よ値奉ての目くらべすらん假

ども云。建治三年七月 太平記

四 卷十 建武二年十二月十一日。箱根竹下合戰

の條より云 加様よ目くらべて。鎌倉よ集り居てん叶す。云々

異制庭訓往来 正月七日の消息の中に遊戯の名目をあくべ。月比頭引

膝抜云。とくく。此ノ貞和二年の作あらんとこれらをつゝて。まつまへらと

あらげかく。考へ別よある。考へ別よある。考へ別よある。

いふ事のあくべをあくべ。此事へ先板の卷よりれども

うらみあれば。うらべよ。

○宿世焼 四

異制庭訓

拾戯の名目とす

宿世結・宿世焼

焼の事考ふよ 増補越後名寄 著作堂藏卷三十二云「正月十五日左義長の燃張りの本を宅の炉中より焼其火より縁結の簾燒と云奉。童部共うど、資の脹と手て品形を稱て具ぞ。云」とり。これ宿せ焼の遺意す。あらざる縁結の火は焼と稱す。」と云ふ事とおや。

〔異制庭訓〕を貞和二年の撰と決ひとなし。今文化十一年を以て古風也。そんじてびのりのうたをもべべ。

○見世棚

十五

今世の商人の物賣所をたると見世ともいふ。又バ家の端より棚閣をまづけ。其上より方の賣物をあさりて賣うるやうだ。とくに名をとまつ。その棚へうつ物をとまき。往来の人によさせて賣らんため。まづ物うれば中古に見世棚ともいふ。後のことを下畠して見世と

のりもひいた。下に坐する古閑をとて。古の見世棚のうはとあるべし。今餅屋の山墓といふ物うどを棚のあくとてありべし。唐の織ふ町家のうをかくもの。今も京都より奥の棚。衣の棚。江戸より奥たる十軒たるなど。有名残り。町家の軒やと棚やといふ。古言の残り。○店の字をたるも三セともうむ。義訓を和名鉄 十卷 居宅類より云「四聲字苑云。」
店云坐賣物舍也。晋の崔豹が古今注 上之卷より云「店所以置キ。」
貨鬻之物也。とあり。此字義よりうてたるもそれをとての讀也。
○さて商人の物賣うるを棚といふ。古に證ひ宇都保物語 第四 藤原君の巻。流布本たうりとの序より。商ひ一経の車をうる所より。こゝにうべし。宿夜のきのう。北頭白。食物盛。のちうほうまつ。それもたすよ車をうる。中じよ車よしとよ。物のうとくまつ。それもたすよ車をうる。棚賣。とくにうとくまつ。なげやりどもうとくまつ。たすよ車をうる。」

此の名のままで上巻す。と多くひでうきあけり〇うちその時代へ詳くらべ
源氏よりよきもの物とひれべ。棚たなももとてのうぶひとくまきりどく。

正左日記 諸本より「まざれたりの小櫃こびつ」と云ふとゆれど。家卿本ト幽

附注本より「まざれたりの小櫃こびつ」の名も云ふとゆれど。権園主人も云

る「正左日記考證」云むれど。されば櫃ひつをかまてりのうれる事の。さむだき
は日記の買之め。承平五年の紀行されば。いとまざれたり。承平五年す。今文化十年
ある。かくそ八百七十九年あり。

○中古見世棚と称する證へ

證へ 庭訓往来

云云

市ナシ

町マチ

者ハトホニ

通ツバツ

子コノ

小コトコト

路ロード

令カミ

構カミ

見ミ

世セ

棚タナ

絹ケン

布フ

之ノ

類ルイ

贊ゼン

菓子アシ

有アリ

賣バイ

買ハム

之ノ

便タヨリ

之ノ

様ヤツ

可ハキ

被ヒ

相ハシ

計カウ

也カウ

時野隨筆

卷二

處ハラ

訓ハラ

法ハラ

印ハラ

元弘四年

又見世棚の名づくえたり

正月廿一日

登タマ

とあれば

見世棚と

ともぞ。古より

處ハラ

法ハラ

印ハラ

元弘四年

勸進聖判職人

奇合ハラ

天文六年

のち考ハラ

別より

考ハラ

別より

考ハラ

の哥ハジメ又ハシメどうも花の千本にハチバンせられたまのものいづく

棚タナ

の名ハシメあまくら

き。二年ひくり半ハーフめうり。ほ移ハシマよ茶屋ハシマの本庄ハシマより居て茶をう。ありて

奇異雜談集

天文中の作ハシマ

卷二より

家ハシマめんの婦人ハシマ

よすく支ハシマ

○見世棚古圖

これの鏡づくしの後卷

祇園不京四条

の町のえぜ棚

のさゆうり。は後

またの時代。

つ手びしりあらぶ

どもあわてて文安

宝穂のうのめと

ありから考へあり。

とふるふりまぐ

りらう。井百番

のうちの松山

がまくのうたらば

此絵巻のうそべ

がまくに似へる

ところあく。これ

文安宝穂

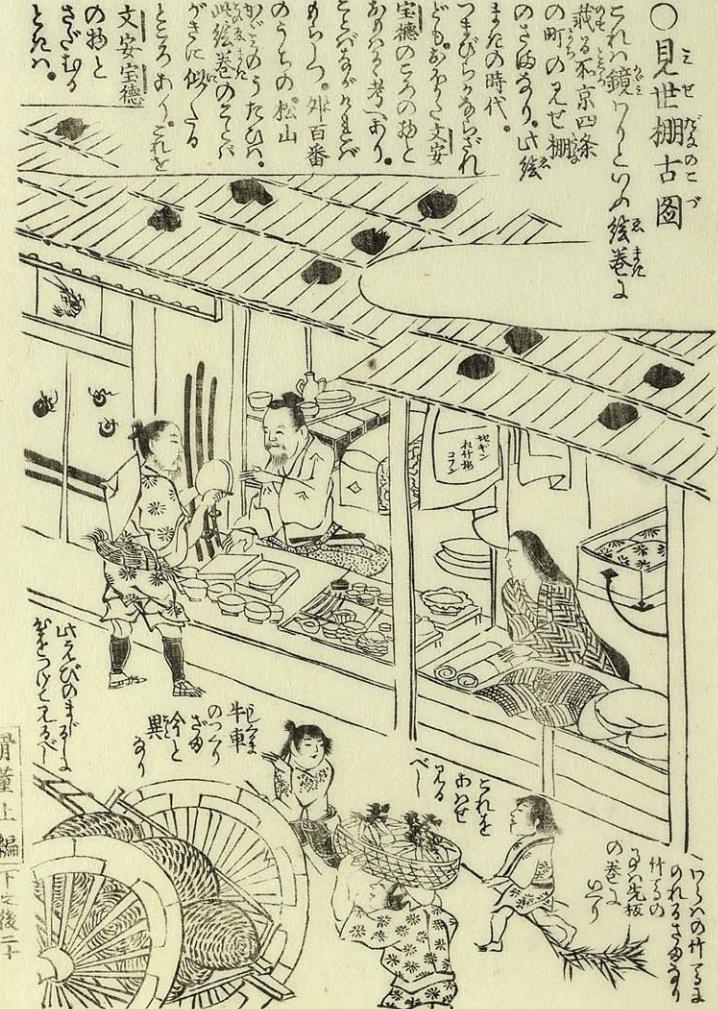
の物と

まふゆく

とおひ。



貴富櫻圖



臂董上編下後二十

よひをりて。ぐに棚をほりて。胡丸五六を生じ。うか。

醒云今も八百石の棚をもつて風邪子

のたゞひをもあく。運歎色葉集

天文十六十七年の撰

卷四よ。見世棚の名をいざり。

北條五代記

卷十

天正十八年の條よ云。拵又松原大御神の宮ま

西町十町から。毎日市立て。七度の棚をあまへよかどる也。も買ありう

と。百の賣物よ。もの買物有て。群集比又云。町人の小庵をうけ。諸國津

浦この名をね。持來て。賣買市をや。或ひ見世棚をあまへ。唐土高廉

の殊物。京坂の絹布をうるもの。云々

新市よ。の棚をあまると云々。狂言記卷四。拵賣の棚。五度の棚をうろくの詞。この外狂

言よ。わたり。続狂言記卷河原新市。と云。狂言よ。『いのちのあん市をどざる。うらみ

だく湯をうりてまわらふと。どんと。す。中譽。まの。わざにうれどざる。うりとてを

ぬ。せよ。と。われば。どきのまゆを。併す。あく。

清水物語。享和十五年刻。上巻よ云。四條五條の辻よ。あめをとてたまひとよ。

ソウ一もぐのあとをあつめてあき。人の用次第。よう。あめをとてたまひとよ。

貞徳文集

松の屋

藏本

下巻よ云。料紙商賣付。見せ棚で。松を以て。も。引ひ。云々

骨董上編下之後下

山文集へ寛永のもの作れり。眉中よりこれらを上の古圖と合せえて、いよいよ見
考ふる所あり。寛安三年官教せり。これらを上の古圖と合せて、いよいよ見
せ棚のさし書き考へりべし。

○商賣往来

ふも見を棚の名えられば時代もあらう。今もあら
じ上の古圖を考へるもあらう。右の性來へ元禄以後のあら考證別より。長のれんのさあしあるべし。
長のれんは三つたからう。玉子りもじをあきのれんなどあら。長のれんのさあしあるべし。
今のおぼりのりと云ふ。今たからうがみあたる歴代がくどり。海老をさりと云ふ。
おとづる名なるべし。朝方やまうちりうけとかが一さあせあけより。今の多羅のれん
うれうれうけ。うれうれうけ。

○虫のたれ絹 きぬ [十六]

夫木抄 九の巻 正三位李能卿 夏草の哥小

夏部三

詩林拾葉

此哥のひのたれきぬは、夫木抄のうちれ難義の一つあり。
卷三より。右の哥を注へて云、「蛇のきぬ」ときたるを。虫の垂絹と云也。夏時
行旅人。草中れをひびぜり。もりとひむをうるべ」とて。多くひがことあり。

非空集
異名分類抄

四の表より。右の大木の
鳥と葉と
虫の垂絹
蛇のきぬ
鳥の羽と
虫の垂絹
葉とあら
さなまち

續世綱

卷十 おもこへあ

蛇のぬけやの異名ともうる。され、一時の失うべ。
○醒察どくよ。りのたれきぬとひる。ゆごひらの絹を笠みぬひつけたるを。
頭より身とあらひて、山形をゆくに。蛭うどをさりん糸よせーあく。その因ふ小
虫の垂絹といふ。古画よ所見あやうり。下からざせる古圖をみて。夫木の
哥のひを考へ。蛇のきぬとあらざるをかりふべし。又

續世綱

卷十 おもこへあ

のうちきの修よ大臣家のつへん小大進とひる女。熊やまうりとあらる。
道中の本をひる。かくよ。ひめひめひめひめひめひめひめひめひめひめひめひめひめ
えさうあらぬことのあらうるが。けふまん所の。京よりであまとひて。とひて。あ
ともむしのぬことの。ひめひめひめひめひめひめひめひめひめひめひめひめひめひめ
くん。あらぬことを。京より清きとくあると。とひて。大ほどの序つづひみあら
が。おひかけぬとらのあまがりたり。云々。うみ。それちよそめぬと。あらぬこと。
秋のせうとらのあまがり。それと人よしきられ。うみ。うれへ小大進うらの。京よりの。旅
ふとくの。うれへるあらうり。それらふうりて考ふれば。虫のたれぎぬ。りと出でる。

○輪鼓 下七

輪鼓。ハイとあるき齧具之。倭名鉗。卷四 雜藝具小云 輪鼓。本朝相撲記云。輪鼓。

二人。諸雜藝之中。弄輪鼓之者二人也。今案此物所出未詳。但其形如細腰鼓。而輪轉於絲上。故以名之。

新猿樂記品玉。輪鼓八王。とづけ 沙石集卷五
蟻虫の問答。小あゆ多に蟻を蟻とあひる。そのころりんと問。中ハ
くじきて。前後のかこちあるゆゑ。小蟻もと答。難して云。前後わざりの
と蟻もべべく。輪子等とも蟻と云べ。」
とりくること見ゆ。かく蟻の腰乃

野守鏡

永仁三年に上卷少云

アミうごとゆふはと。風情とくらすと。甚義

ねあくま事あくねり。アミうごとくらせば。心と繩のくふうがきたちを。
あげあぐれどもわらぬ。いぬごとくもまくぬさむかあげあぐまば。ナリく
とておほるがごく。哥も未いづくがほに代せよさんとされば。詞のる
かからびて。風情のアミうごねほる事あくねり。云々

太平記卷十 鎌倉

兵火車。又云て條少云 羨小誰とへ不知。轄子引兩の笠符付くる武者。

五十餘騎。云々 壇囊鈔

文安三年作 小兒の齧物の中 小輪子

たり同書

六十五條 第幕紋の名目の中 小輪子

又輪鼓

とあり。

○これらを参考する。伎藝也。つゝねびゆもゆひて。糸のくふまほせ。あひ。り
めくつまへりん。あく多く。そのからく今のかづみの。紙小似くまうる。

七十番職人寄合の旗下の著物小

伊呂波字類抄 林逸詩用 運歩色葉集

等も。輪鼓の名をえられば。遊吉生でもりくまを

あそべるものにてある。

○子日れ雑遊 賦物の比比奈。 十八

宇都保物語

卷のあづの 太宮

あくまれゆひて。正月二重めの子日。百日あ

まるとひひかる時。ひひかる車。又箇あけ車と箇あけ車。牛ひひかる時。ひひかる人のせ。金浪の箇あけ車。又馬ひひかる時。うちの馬ひひかる人のせ。子日の箇あけ車とひひかる。今けきの女のつゝ。ちのまきをあわふ。ひひ

あひ人のせそひまわくやどこれか似てり。今もつへれびがれど。

○國ゆづりの卷の下やもひの事よりれどさのとそりらー。

○つをふ。詞花堂主人ううかと考へたさる。王琴と云めや。

○江家次第

○江家次第 卷十立大子の條。阿末加津ふるくて比奈の名えぞ。

案じるふ。うにそる比奈ハ。今のお嬢子のたひて。贋物のまつり。あるがゆのあらも。すくひをしる。後具の遺意から。あれもある。此書は延久以後の儀式とかれるものあれば。とくちう。それからうだ。比奈のやもす。

○歲古記

○歲古記 小慶長三年三月七日。この日の夜をかと。傍人きよめぐは。きぬまきせき。おまかしゆおも。八日。きのうの活人形をかと。あはれ巴日の

ぞりつりのく形。されば今世のとく。上己と期とく。ひかとりてね。慶長以後のくりうべ。但て。そのまゝへるふ。アモリ日本紀通證卷十小日次記曰。上己離蓮。云こゝある。黒川氏の。日次記事のまこと。かげと。東見記下巻。二百升冊あり。とく。日次記のまこと。おひままで。上己のひる。おひの古き。あく。家ありひと。通證のかまど。まぎまづき。がく。かく。かく。かく。

○海老上膳

十九

今わらのなす。魚の目を頭。紙の衣裳をきせ。ひのあたはく。海老上膳とぞりあらふ。これ寛文のとく。あらわづ。正長

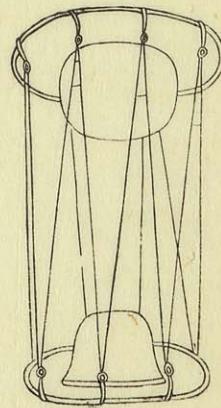
誹諧三つ物小

うら白や海老上膳

十九

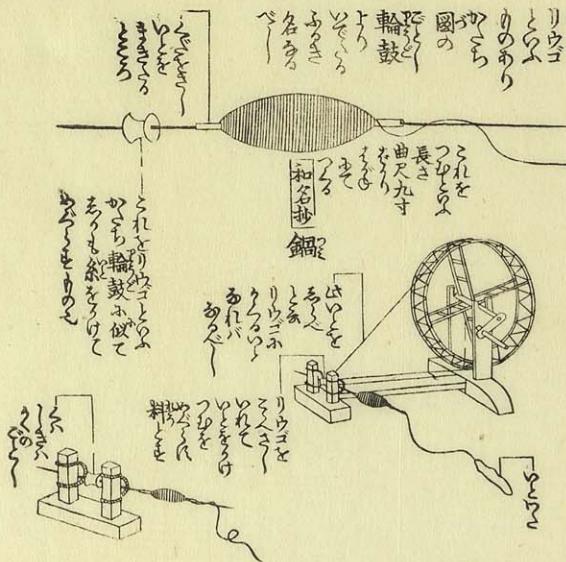
○腰鼓圖

卷三墨用三ふ載



○紡車

十九



○和名抄

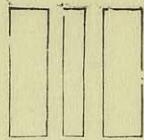
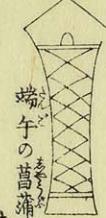
ふ。アモラハ。其形細腰鼓の

ごく。とく。この法。このかく。

かくとく。

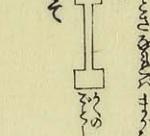
○東海道名所記卷四みま。腰鼓。あく。あら宿の名物。たゞけやき。未だ。あたまの。のあら。たゞけやき。あら。まき。備や。あら。小倉。あら。松。あら。緒。あつとく。あら。倫。あら。かく。に。當。まく。あら。万治のとく。かく。まく。当。まく。あら。りの。かく。

○刀の柄ハ一種イチヨウかくはざくと
あふぐひきとし今もりう柄ハとしよ
かくは
とねふ
さきば
端午の菖蒲カモメモあふ
は柄ハ



○△今ノ仕打ハシマタからだを手キツり打タケル
リウゴリウゴ別ハサフ混ハシマフ腰ヒダ鼓タムの本形ハシマタ
機マジをすく本ハシマタあり。ちまくふつま
考ハシマタ別ハサフふあう中ハシマタ編ハシマタとしよ

○腰ヒダ鼓タム引ハシマタ兩ハシマタ中ハシマタのちまくと三ハシマタびまハシマタもへ。
三ハシマタちまくとおあくとまくとめだ。まくとめだと
引ハシマタ兩ハシマタ下ハシマタ異ハシマタ本ハシマタと引ハシマタて作ハシマタ三ハシマタ引ハシマタ兩ハシマタとあら。



○寛永のこうじ見聞諸家絵ハシマタとしよ
室町家のこうじ見聞諸家絵ハシマタとしよ
りの小ハシマタのどき故ハシマタを載ハシマタ
号ハシマタ輪鼓タム弓タマ領ハシマタとおり太平記の
輪子ハシマタ弓タマ兩ハシマタハハシマタそれハシマタ左ハシマタ右ハシマタと
中ハシマタ引ハシマタ兩ハシマタ中ハシマタのちまくと三ハシマタびまハシマタもへ。
馬ハシマタをかくのとまきかくらふをあらと
リウゴリウゴをあるとくつむ中ハシマタくびねるが
リウゴリウゴのゆくわ
修ハシマタもだあく



○腰鼓兄弟ハシマタ三十

世說補ハシマタ卷十九下注ハシマタ小南史曰沈懷之三子淡深冲名譽有優劣世號爲腰鼓兄弟ハシマタ抄撮ハシマタ卷小唐禮樂志腰鼓廣頭而織腰鼓兄弟蓋言伯季優仲劣也

○腰鼓兄弟ハシマタ三十
抄撮ハシマタ卷小唐禮樂志腰鼓廣頭而織腰鼓兄弟蓋言伯季優仲劣也

○腰鼓兄弟ハシマタ三十
抄撮ハシマタ卷小唐禮樂志腰鼓廣頭而織腰鼓兄弟蓋言伯季優仲劣也

豆腐と壁ハシマタとくことのあきよへ先板の巻ぶりへれどもこに引ハシマタせまと
舉ハシマタ七十一番職人奇合ハシマタ豆腐賣の月は哥ハシマタかくもくへかべのとたえふあら
とくあきよへ月のそむけざりと上賜名事ハシマタ女房ハシマタこくべとくの條ハシマタ奈良

ふハシマタどうぬあうぬとくも右のあくへん奇合ハシマタとがくとくわら。
とくあきよへ月のそむけざりと上賜名事ハシマタ女房ハシマタこくべとくの條ハシマタ奈良

○宗長手記ハシマタ卷大永六年十二月の條ハシマタ也ハシマタ正ハシマタ火邊ハシマタ生ハシマタ城ハシマタあく

田樂もうふの盃。たひきをやつて。あく

上巻中も。御遊六七人あり。御りて。田樂の膳

きのあり。大永六年より。今。○俗説。豆腐の田樂もあ

文化十年生だ。凡二百八十八年。

○俗説。豆腐の田樂もあ。本名ハ

文化。其のう黄毛で。皺あるが。姥の面皮。ふ似て。その名あり。とくへるは

みどりこと。ゆり異制庭訓往来。ふ。豆腐上物。あるこそ。本名をばなし。豆

腐をばなし。えふうかひ皮。あまみだ。さへりくもん。畠て。とくへるのうじゆ。

音便ふはかりと濁す。うぶどう。うりあむれの俗説。あどぐ。バとくへ

もうとゆと横ふかへ。もあくへ。き訛りもある。波。

○菖蒲。再考。二十三

延喜式。卷四。彈正式云。凡金銀薄泥不得爲服用并雜器飾。但五月

五日。諸衛府甲胄之飾不在制限。

辨内侍日記

下

建長四年五月五日の條。云。女

菖蒲。午の菖蒲。此遺事歟。

辨内侍日記。下。建長四年五月五日の條。云。女

房。こし。ふき。かわ。や。せ。か。せ。花。ど。と。あ。や。あ。う。ほ。う。か。け。く。

跋字

け。き。あ。だ。と。あ。く。年。皮。侍。

建長四年
化才主
六月五百
もあら
あら
あら
あら

○一。馬鞍のあやめ。あじと。印ひある。かずへ。と。人。や。あ。る。りん
き。り。一。ハ。年。御侍。少將。内侍。あ。ど。そ。そ。れ。の。あ。房。だ。ら。ふ。菖。蒲。う。よ。き。せ。き。ひ。一。あ。ど。そ。○先板の卷。ふ。あ。ま。ま。か。ど。あ。ま。さ。あ。く。ふ。園。大。曆。文。和。四
年。の。を。う。を。引。つ。れ。ど。は。日。記。ふ。建。長。四。年。も。く。此。移。あ。れ。ひ。く。あ。る。一。建。長。四
年。ハ。文。和。四。年。より。あ。ま。そ。百。餘。年。さ。な。あ。り。○塔。多。み。の。か。が。み。花。の。事。ふ。さ。ふ
先板の卷。ふ。ひ。り。ふ。こ。う。食。色。そ。く。一。

○板風呂。湯錢。風呂屋。二十三

今物語。小。ある。僧。ひ。く。ろ。と。云。あ。か。入。一。事。つ。と。う。り。そ。の。父。と。考。字

ふ。戸。ある。物。と。き。み。ゆ。此。物。語。ハ。信。實。頼。臣。文。治。承。久。の。の。か。れ。く。る。相。之。

風呂。と。く。と。多。い。あ。る。事。と。と。う。り。あ。ほ。ふ。き。物。ふ。あ。り。ゆ。あ。る。

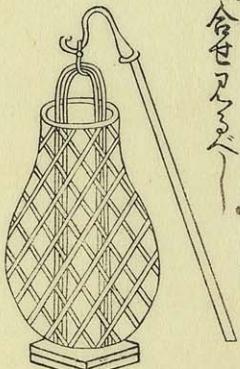
○日蓮御書録内。卷三。四條金吾。小。あ。く。れ。一。書。小。げ。第。共。あ。く。當。ふ。不
便。の。由。有。べ。一。常。小。湯。錢。ざ。ま。る。と。の。あ。く。ひ。あ。ん。と。貞。一。一。あ。り。か。
文。永。三。年。ハ。當。時。も。く。鐵。湯。風。呂。あ。く。一。あ。る。一。
太平記。卷三。延文五年。乃
き。一。これ。い。寺。に。と。く。方。風。景。あ。や。

所ふ今度の乱ハ併島山入道の所行也と落書あり。哥子も讀湯屋風呂の女童部す。でももとあつひけとば。多くこれへ京都の町小風呂屋ありて湯女あらもありやうふまきゆ。

○提燈再考 三十四

朝野群載 四卷 應德二年十月卅日 法定院佛聖供灯油料狀み云
置佛像之前無挑燈柱云く此字画あくらむ。下学集鑑裏抄等文
挑燈の字滅らる 壇囊鉢 文安三年撰 火呂をアンドンチヤウチンらんと云。文
らんと云り。 壇囊鉢 卷三第八条撰 火呂をアンドンチヤウチンらんと云。文
字如何。 挑燈と書いてチヤウチンと云。行燈とアンドンと云。皆唐音
缺。行の字をアンとよむ事。行在行者等也。 安のころ。火呂と云て。御元
どんとも。らやうらんとも。 カクリツとて。は書と云れる文
りをもとく。 とて。
提燈の字あらねれ。 走衆故實 天文永祿のころ。因これて傍らやうらんま
アリハ。金鞭とくり。 もふうげてあり也。 塹塚物語 天文廿一年撰 卷五雷門事
件

先板の巻小唐主 からくると夕れど。おうりん鞠の勢ある火がころびもしる
たゞむちうらん のもと。外のまえど。唯くまき御也。 とある。これハ筆ちうらんあくと。たき形乃
あくとよどむ うもあつ。これと先板の巻の提燈の條よ。合せ見るべし。
眼の玉塚 三才圖會 善用 十二の巻小所載 提燈あり。
先板の巻ふくらむ 壇囊鉢 先板の巻ふくらむ 壇囊鉢
ちん。此唐制のこころに 見るやをあらぎき。



○行燈再考 三十五

行燈へひと提ありく専小制する物也。家内ふきあへ後之事えどより
證を又そりでもとく山伏道葬送行列次第 杏花園とひよすこ書小
導師先達 檜 次馬 次捧物 次左右行燈 次棺 云く 無縁雙足紙 卷
宿茶毘之次第とぞる條ハ一番幡四流左僧持 二番行燈四箇右行

者持云

これも、鎌倉家のころは華式うきし。あくと、いふを考へれば行灯が今ちやうるのとくに提ありきに

累解脱物語 卷下

のうがひう。行灯しりてつれ。村中者とも稻麻竹葦と並居る。元禄三年の御本へのころまよ田舎者より行灯をさけあらき。先板の巻ふ引る。戲聖ちあゆく町の發句と同時し食を考へべ。

○ ぎよたうのちやうりん乃再考

二十六

先板の巻ふ秋の夜長物語と引て。ぎよたうのちやうりんとある。魚綾乃誤て綾とそりて挑灯かんとりゆへ。おあてれひぐととすき。古印本ハギミチのちやうりんと假名ふかげと。後ふ古写本とぞれバ燈炉とあり。それたゞかる證あり。灯炉とありてハ挑灯の證ふハあらじ。とくべきと上ふりて。ごくくと挑灯と灯炉ハひとつ物かねば。古印本小ちやうりんとあらむ。後のさくらみへあらざるべ。○また魚脳の挑灯とりて。唐國の魚魁灯の事え。明の田汝成^{タカシマ}西湖志餘卷下 燈市

○ 古画行灯挑灯

四七

○ うれりあ 行灯ときあくまくる
たゞる 譲^{シテ}今茶人のゆうる
露地あんどうのゆうりに古制の
力みれうとこれ坐てまくる



出售各色華燈。畧豪家富室，則有料絲魚鯛云々。——
寶貨辨疑

百宋
名書

ハ豪富ふあくぐれ得がきやどれ高價のねみべ。——
ノ中ニ小魚鯛と載て價低きものハ成器難得とあくても御ひやべ。

收ナクシキリ小魚鯛を載て價低きものハ成器難得とあくても御ひやべ。

爾雅卷釋魚の條下小魚枕の事詳之。本草綱目

卷十四魚鯛の條下小諸魚

の腦骨を鯛とす。とあれば古へ此渡るまゝ。——
鰯火城此で魚腦の灯

戸とも挑火ともとめく一あらぐ。——
色正青云く枕如琥珀可以籠燈。——
形似鯉而背青色又頭中骨贊之可以製品。——
わからぬ。灯のあいはくれるもののみ。琥珀のこじかくあらわとまことわりて
うつくしきのことをあらわ。紙の表もあらわふ。やくもをひてこゆ一少かくあらわと
わからぬものあるべし。

升菴外集

卷九十六少云

江有青魚其

河南通志卷十三少云

青魚出濟源

弘治二上卷み此外魚腦

年撰

林逸節用器財門小魚腦石之桂川地藏記

弘治二上卷み此外魚腦

年撰

桂川地藏記

年撰

此地藏記

弘治

二上卷

み

此外魚腦

也多ハラ魚鯛也。寶貨見あるづとあらぐ。——
○淮南子卷天文訓少云月虛而魚腦減。

五十五小收もつり。——
王羲之斬茶帖

書記洞詮卷

少云石首養食之消而成水此魚腦中有

石如某子。——
石ある。なほめ。器かほんときりのあらわ。

○胡鬼板胡鬼子子越杖再考

三十八

年中定例記正月十一日。内侍御の御舟。御くの儀。又今日比丘尼出で御奉。御くの儀。——
バカリ菟亥波の注釋本。是ふふね。今もよそりへくに。ひふみよそりと
めくらぬ。——
○銀鏡集下巻。遊樂名附。遊樂具。——
書へ定例記。——
今世小。正月女のつるはせりとある。手鞠のはづめ詳かく冠辭考卷四七
○摩利菟亥波の注釋本。是ふふね。今もよそりへくに。ひふみよそりと
りくらぬ。——
天智紀あくべの。羽子板越杖と祝儀のね。——
羽子板越杖と祝儀のね。——
上代かほまのまきをありつらう。——

古事記傳 卷二

七ゆる右の説を擧てうけらるよとひ

穂と教くと云ふ

もあがつるや

。

をわけり。下かひませるとるべ。今も田舎にて正月五人十人まじりて多くとも見る。

それ古俗の残れるあん東がみ小き鞆會とあるもそれが穿合せるがごとく。又今は

まつをほんたひあらむよとぞするはりと二三よりのぞむひまき。まつをほんたひまき。まつをほんたひまき。

をさきのものとぞ二種鉢者

の説はどかくにうけられ。

平治物語 卷一 鹿山物語の段み云

。

先一の箱の修禪定の具足の中ふ勢手鞠

許して音有物あり云々又下恩源大為雷事の段み云只今手鞠許の物。

巽の方より飛るハ

かくまきをねぶたうそりねば當時へられ

東鑑 十六 貞應二年の條み云

正月二日於若君御方有手鞠御會同月廿八日若君出御西御

壺有例手鞠會

廿三日の條み云

廿三日正月廿八日手鞠御會

同月廿八日若君出御西御

廿三日の條み云

廿三日正月廿八日手鞠御會

舟内侍日記 卷上 寛元五年三月



○これハ文禄慶長のころに繪あるべ
時代の考へ別ふありかくへがくのび
ても鞠とほくにあひてつまへてうさ
わくのひきつまへてほくへ
ちうのとくぬゆあをゑ

秀吉傳

當時の画をよみぐる
かくはぐく袖口せすす
慶安二年の印本

尤之双紙 上巻小引トき物
袖 手立とよのへこれあるん



江山堂所藏



骨董上編

下之後批二

東鑑のこととを注せるりの小手鞠と手越小作と手毬會、打越の事やこと
るへども一異制度訓ふ。手鞠・鞠打ちとあると二種のゆとせらる。手鞠會ハ
打越ふあらむることやらぢろ。

京山人画集

○天和貞享の比の離人形

三十

前



後



○天和貞享の比の離人形
前
後
○真面目とうとんさ圖のぞく
井原西鶴が遺稿と元禄八年
印旛行せる。物語はとくよりのあり。
四のまことに美女のよもぎとみゆり。
そのまゆはわらわらとまなづる。
その髪のむくじにかまどす。
あらばけ活用がよきものあるも
あうでこくしてまくゆふゆく
ゆゆとかく。又「わらまくがまくらま
ひきのまがりへとめぐらめぐらめぐら
うねざくわき」又「まきびんうき」と
しゆもはひのゆきあるかくあきだ。
これと天和貞享のまくせりのと
さきか。西鶴がさく一わらわ
あらばくこそみるやれど。かれ
はひのゆきあるかくあらばけ活用。
あさすくごくまきびん。とくゆく
ゆゆかくともよぶ。

○天和貞享の比の離人形
前
後
○貞享四年
文政七年
七年ヲ
合

名義ふたぐり。

○帶の
むじとひやく
むじせうそのま
うり

京山人百樹、哥麿

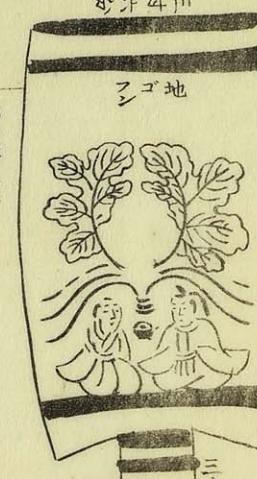
○信濃羽子板

三十一

此古制佐久郡の邊の小手今あはる
とを傳承かへておづく古雅

地ふ胡粉と
ゆう修へかにかり
墨あそぼうと
ひらりのと見る
丹草のとす
蘇枋をとす
りうどんと
ソウム粗糸と
のへ曲尺と
さうりあう
総長九寸七分
あさき一分五厘
さうりあう
ひめの
雙葉と
そろみわく

小斗 4111



シゴ地

三寸二分
木地又ゆ。



松雲庵藏

丹草のとす
蘇枋をとす
りうどんと
ソウム粗糸と
のへ曲尺と
さうりあう
総長九寸七分
あさき一分五厘
さうりあう
ひめの
雙葉と
そろみわく

のへ曲尺と
さうりあう
総長九寸七分
あさき一分五厘
さうりあう
ひめの
雙葉と
そろみわく

○虫のたれ織の追考

三十二

和哥分類 卷衣の部 虫のたれ衣 御集 [カミアリテヒルモアユヘタカニ] あり
病ふかけたり。けたれ衣。後柏原院 とあり 柏玉集 四秋哥上。虫 [ヒルモアリ] あり
あけむ虫の表よ とあり 三玉集類題 痘虫 [ヒルモアリムヒルモアリ] とあり
おりて [ヒルモアリ] と と字の形が似たもて。いづれも一方あやまつてある
べ。あくまれ。此所製ハ虫のたれもの。序哥 あくべ。ひれこれまぬ
とちへ。和哥分類のあやまつて。おりひきよべくば。

○打出小植追考

三十三

宇都保物語 の巻上 俊蔵波斯 あひてり。にほん寝がわづかれる。室の本と乞う
こととくら所小 あひの上中下。かまうのへあへた福徳の本あり。一もんとりりそ
ひあひつらをたくふ。一万恒。沙のたまつ。ロヨモヒグ。木本あり
づらふ似する事也

骨董集上編下之卷後終

○追加・姫瓜節供・髪葛子節供・三十四

今伊勢桑名つゝけ俗小女童れことづふ。八月朔日と姫瓜の節供と云ふ。
ひらぬ小顔を書きざぶねうのとひろどうて頭とくつけ木。又竹の筒をと身
とく紙。又絹あとの衣服をさせ。ひらか人形あはく。相ふナタ酒赤飯をどと
あてまへる。又九月九日とひぐくの節供と云ふ。ひのか草はそちひく
男女の頭をひく。これも棚あはえ。おあくべひく物をきてまつるとぞ。前あも
しろごく。瓜又新く車ハ清少納言の草紙あらえ。ひのか草はそち車ハ
源三位頼政卿の父源仲正が哥にあられべいとくをき事あり。接ふわら
はりみへ質朴あり一きふ天兒母子なづけ器儀とく。贋物のそろびを
まほする古俗のかどうあるべ。○それらをそむひあまうりとよりぞれ。今れ
○和名抄をそよふ。今のかへと。古へかうとりればかくこの節供と云ふ。もふまきとあく
らき。後のひのく。此がくの子の奉のうねるやうや。○江戸らまき地あく。
ひのく草つゝく。ひらかく。もれど。わらあてまつる。やせん。
○此事ハ伊勢の桑名の公翁麻呂めのゆくとくひおとせり。此巻をかまく

たる多のらかなと。つゆの實素のあらはるるときのあれば。じまう考へをくらむ
かまのを内。前の備よ金をアラベ。

攝陽郡談

卷十六中云

姫瓜

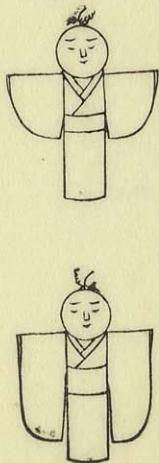
住吉郡。遠里小野の田圃ひだりのむらのたんば。所々市沽いちぬき。出毛。多ハ坂道さかみち。あり。大さ鷺の外ほかのひく。色
えきらうと白く。りくとて人の面を
画がきて。幼童の歌うた。とあひだ
黄色きいろ。かくもあ。黄きいろ。白しろ。もふ
美うつくし。もふれて。鑿さくき形がたと
以て。号あだは。とく。此書ハ
元禄十四年印行せら。

これもあらかく
ひらうとひるをひて。あひだ
る。徳とくのひらうとひる。
引ひく。せん。筆ひのひのひに
こふ舉あ。

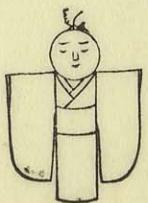
○桑名つゝけあそハ
ひのく草を
あづく草と



○九月九日髪葛子圖



○八月朔日姫瓜雛圖



伊勢桑名
公翁麻呂寫真

骨董上編

下之後卅五

○花かどひの考○唐土の鞞子ハ此の羽子に似る事○魚とくじく再考
 ○きりと灯籠の考○獨樂の考同古圖○端午の花五月の考同
 古圖○編笠の考古圖○端午の花五月の考同
 ○宗任^吉梅花の考○朝夷名^{シテ}鶴の紋の考○蝶の考○編木摺門説
 經の考同古圖○放下僧^{ヨリタチ}あやめとあや竹の考同古圖○千駄摺
 の商人の古圖○せん^{シテ}物賣の考同古圖○茶筅髮三里紙の考○女の髮
 の風古圖○そん^{シテ}物并小文字入の文様の考古圖○目黒の
 りら花の再考○いづれかどり○棚機の牛馬○尻おひ比丘尼○踊
 の古圖○蝶燭○若衆^{シテ}舞妓れ古圖○皿屋敷の考○手鏡と
 いふ詞のと○枕久塚の考^{同清進}○祇園^{シテ}稚女^{シテ}の肖像○友禪染の
 考^{此外あるとされど}と云々

江戸

醒齋老人著京傳

傭書

凡例目六下之卷来自

井四紙至卅六紙

刷人

島岡長盈
藍庭林信
名古屋治平
朝倉吉次郎

加減朱子讀書丸
 一文五合・重んとほんとおむぎえをくへ心筋のきくもんとおむぎへ
 はいをくへてゆきつぶ人ばかりも、病を生じて天井をこすり、かくはくを
 ほたくらで益美^{シテ}。うへくへくへくへくへくへくへくへくへくへくへ
 傷のふたくらで益美^{シテ}。うへくへくへくへくへくへくへくへくへくへくへ
 印章篆刻^{玉石銅印古体近体のもの}、應を^{らよ}石上刻^等
 一次刻^{家朱文七字白文五分大印}ハ此限^ののへ

鴈金屋

東都書林 青山清吉

小石川傳通院前